

優秀賞

## 見失ってから

専修大学附属高等学校 1年 小川 遥希

自分の個性なんて無いんだ、そう思ったことが私の失敗だ。

私にとって、絵を描くというのは最大の武器だった。誰にも負けなかった。実際は数え切れない程の人に負けているのだけれど、勝っていると思えたかった。私ならではの特徴なんて、それしかなかった。

中学三年の夏のことだ。私が勝手にライバル視していた男子が一枚の絵を描いた。彼が机にそれを置き、集まった人の頭の上から机を覗き込んだ私は、

「見たことないくらい上手だね!」

とすぐさま言った。何か喋っておかないと泣き出しそうだった。その絵は本当に、本当に圧倒的だったのだ。私を常に誉めてくれた先生も驚きを隠し切れない声で言った。

「彼のレベルは今まで見た試しが無い。」

フツ、と心が陰って、もうあなたの居場所無いよ、と言われた気分だった。その時気付いた。私の個性なんて元から無かった。

それから数ヶ月が経ち、私が慕っていた先生が退職してしまうと知った。自分の絵に自信を持たぬまま色紙を描く仕事を引き受けた。私は色紙に涙がこぼれないようにしながら何時間もかけて仕事を終えた。

離任式当日、強ばった顔で色紙を渡した。泣きそうだったし、自信が無かった。恐る恐る先生の顔を見ると、あの男子の絵を見た時と同じ顔、ただし先生は泣いていた。

「あなた以上に絵に気持ちを込められる子は今まで見たことないよ。」心が晴れてゆくのがわかった。

これまでこの言葉に何度救われただろう。自分の個性を見失ったからこそ、先生の言葉はより具体的な私の個性に光を当ててくれた。私の個性は、絵に自分の気持ちを込められること。そしてそれは自分を守る武器では無く誰かの心を動かすための手段であり、私の居場所だ。